

那智大滝と飛瀧神社

那智大滝は日本一の高さを誇る直瀑の滝です。滝の水は、幅 13 メートルの滝口から 133 メートル下の滝つぼに向かって流れ落ちます。その轟音や水しぶき、壮大さが人々に多大な畏敬の念を抱かせたことから、この滝は礼拝の場所となり、やがて正式に飛瀧神社として祀られるようになりました。ほとんどの神社とは異なり、飛瀧神社に拝殿はありません。そのかわり、信奉者はこの神社の御神体（神が宿る物体）である那智大滝に向かって祈りを捧げます。

境内から続く階段をのぼった先には、少し高いところから滝の景色を望める御滝拝所（Place of Prayer at the Waterfall）があります。

祭祀と伝統

ここで年間を通して祀られている飛瀧権現という神様は、縁結び・夫婦和合の神である大己貴命（おおむなちのみこと）の化身です。飛瀧神社は熊野那智大社の別宮であるため、熊野那智大社の祭神は、大社の火祭の一環として、毎年 7 月 14 日にここに運ばれ、一日だけ「里帰り」します。

熊野には 48 もの滝がありますが、熊野信仰において最も重要なのは那智大滝です。このことから、那智大滝は一の滝とも呼ばれています。昔は山伏（修験道の行者）がこの滝を修行に使っていました。平安時代（794-1185）からは、貴族、さらには上皇までもが時折ここを訪れ、山伏たちと同じ修行をしました。熊野那智大社の宝物殿に収蔵されている『那智参詣曼荼羅』と呼ばれる 500 年前の絵画には、文覚という僧が滝の下で 21 日間の荒行を行う姿が描かれています。現在は滝つぼで修行することはできませんが、山伏は今でも那智大滝で他の儀式を行っています。

天皇とのつながり

那智大滝は日本の初代天皇とされる神武天皇によって発見されたと伝えられています。熊野の海岸に上陸した神武天皇は、「山中に輝く光」を目にし、それを探して山に入ったところ、この滝にたどり着きました。神武天皇が現在の奈良に日本最初の都を開くまでの道程は、こうして始まりました。

後年、熊野詣は平安貴族の間で人気を博すようになりました。退位後の 991 年に熊野に来た花山天皇（968-1008）を含め、幾人もの上皇がこの場所を訪れました。花山は那智大滝の下で千日の修行をし、九つの穴をもつアヅビを滝つぼに沈めて滝の水に神秘的な延命の力を授けられたと言われています。現在でも、参拝者は長寿のご利益があるとされるこの水を飲むことができます。

那智大滝はその美しさによって神聖な場所とされましたが、神聖とされたからこそ、この滝の美しさは今日まで守られ続けてきたのです。